

寺子屋プロジェクト和尚の話 第16回：「柔らかな心で」

4月から成人になる年齢が一部引下げられました。

選挙権は、もうすでに18歳からになっていますが、少年法の一部改正で、罰則の適用の年齢がこの4月から18歳からの施行になりました。

自分の言動は自分の責任で生きていくことを社会から求められる年齢が18歳からになったのだと考えます。

コロナのために学級や学校が閉鎖されたり、それまでの「対面」授業がオンライン授業に振りかえられたりしました。先日そうした環境の変化を機に「学校」「教育」についてもう一度考えてみた、という大学の教育学の先生の話を知ることがありました。

学校は一般には、社会に出ていくために必要な知識や教養・技術を授ける場所と考えられています。

江戸時代は、寺子屋で「読み、書き、算盤」を学び、10歳くらいで、親元を離れ、社会に出ました。

明治以降は、社会そのものが変化し、学校は、国家が求める教養の基礎を効率的に学ぶ場所になりました。

そして、先生は、コロナ後の学校を考えた時、わざわざ多くの児童・学生や先生などを対面で集めて何を身に着ける場所になるのかと考えたのです。

今までの学校の勉強の中で、リアルで人を対面で集めて教えることはあるのか。実験、体育、音楽や美術など、体験しなければならないことを除けば、残るのは、人と人とのコミュニケーションしかないのです。

「学校」は自分と違う相手を受け入れる能力を養う場所だ、と改めて気付いたと話されました。

コロナ禍のオンライン授業によって、文字や図形による知識は「学校」でなくても教えられます。

実際に、人と人が対面した時、争いばかりではなく、協働しなくては、社会は成り立ちません。

協働するには、コミュニケーションによって自他の違いを受け入れていかなくてはならないのでしょうか。

翻って、「大人になる」と言うのは「自分と違う相手を受け入れることができる人間になる」ということなのでしょう。

仏教では、協働して生きていくことを「和合」といいます。

「和合」を成り立たせるには、柔軟心を抛りどころとしなくてはなりません。仏教学者で、坐禅も実践された鈴木大拙居士は、「柔軟心」(注1)という言葉を用いて、「柔らかいというのはいわゆる受動性の型、宗教の極致というてもいいので、柔らかでなければ物を入れようとしても入らぬ。何か固いものをその中に蔵していると [われが] といって頑張る。

そんなに頑張ってしまうと、内外から来るものに対して、すぐ反発してしまう。なるべく自分がなくならなくてはいけない。

・・・何だかそこに頑張るものがあると喧嘩してしまう。・・・

柔軟なものになるとずっと包んでしまう。こっちに何だか一物あると、これが出しゃばりたがって困る。抵抗が顔出し始めると今までのわずかの柔軟性も引っ込んでしまう。

これは二つのものが一つになったとっては悪い。それならその二つのものを超えてしまったかという、それも悪い。

二つのものをそのままにしておいて、しかして一つのようなものでもいうか。」

大拙居士は、これが、事事無礙の世界だといえます。すなわち「柔軟心の世界」なのです。

そして、柔軟心になるには、「仏教は一宗教は一真裸(まっぴだか)になることを要求します。」ともいいます。(注2)

自他の違いはあれども、お互いがその違いをも含めて包みあう関係性が想像されます。

また、「(相手に) なりきる」 ことにも通じることかもしれません。

なりきる事は、相手を理解して、受け入れねばできません。

自分の心の中の、固く絡み合っているものを解す事が、相手を受け入れ、コミュニケーションを成り立たせる出発点になるのでしょう。

長門の国(山口県阿武郡)の民話に「葛粉薬」というのがあります。

「昔々、仲の悪い嫁姑が一緒に住んでいて」から始る話ですが、姑のいじめに絶えかねた嫁がお寺の和尚さんのところに駆け込んだ挙句、薬をもって姑を殺

すことは出来ませんか、と思わず口に出してしまったそうです。すると和尚さんは「いきなり殺すと人に分かる。この薬をご飯に混ぜて吞ませれば 7 日もあれば弱って死ぬだろうからそうしなさい。ただ、その間は何を言われても姑の言うことをくはいはい」と聞いて通しなさい。」とって粉薬を授けてくれました。さて、嫁が言いつけ通りにすると、数日後に姑は身体こそ弱りはしないが嫁に対して優しくなり、それを死期が近くなって仏さまのようになったと思った嫁がさらに 7 日分を追加で貰って吞ましたところ、ある日姑が嫁に上等の着物を買って帰り、それを渡しながらこう言いました。「この頃は私によくしてくれるから、嬉しくて嬉しくて。」さあ、それを聞いた嫁は居ても立ってもいられず、和尚さんのところに飛んでいき「大変です、大変です。姑を殺すなどとんでもないことを考えました。どうぞ姑の命を助けてください。」と叫びます。これに対して和尚さんは「そうか、わかってくれたか。お前さんが姑の言うことを聞かないから姑も愚痴ったり意地悪をする。いいか、人にしてもらうよりは、先に人にしてあげるのだよ。」と言って諭し、大泣きした嫁に「あの粉薬はただの葛粉だよ。」と明かします。その後嫁姑の二人は仲良く暮らした、という話です。

嫁と姑、家事という同じフィールドで、主導権をめぐってぶつかり合う関係になってしまった場合、この物語と同じ状況になってしまうかもしれません。和尚様は、嫁の突拍子もない話を丸呑みにして、姑との和合を目指す道を示しました。

以前、子どもの話を聞くときのコツを聞いたことがあります。聞く時は、相手の話を否定しない、受け入れてから、話ははじまるそうです。子どもへの返答は、「い・な・うん・そう・だ・」だそうです。

「い」は「いいね」。「な」は「なるほど」。「うん」は「うん、うん」。「そう」は「そうなんだ」。「だ」は「だいじょうぶ」。

どんな突拍子もない話でも、「い・な・うん・そう・だ・」から始まらないと子どもは、口を噤んでしまって、それ以上話が續かないようです。

これは、子どもばかりではなく、大人にもあてはまるかもしれません。

私たちは、心の中に何かしら固いものを抱えていると、それが内外からくるものに反発して受け入れることができません。

反発してしまえば、コミュニケーションは成り立たなくなります。

大人になるということは、心の中の固いものをいつでも脱ぎ捨てて、素っ裸になることができるということかもしれません。

それは、年齢ではなく、人としての生き方の積み重ねにあると思います。

自分を誤魔化さず真摯に自己の生き方を省みることだと考えます。

柔らかい心で、相手を受け入れ包み込むことができる大人になっていきたいものです。

坐禅を通して自己をみつめ「素っ裸」の心に還って、柔らかな心になれるようにと思います。

注1 鈴木大拙著「無心ということ」角川ソフィア文庫「無心の境地」P38 「道元禅師が中国から帰られたときに、何を学んできたかと、こう人が尋ねたら、自分は柔軟心を得たといわれた」とあります。

注2 同上「仏教の大意」法蔵館から。また前掲の著作で大拙は「二つのものをそのままにしておいて、しかして一つのようなこと」を円融自在、事事無礙の世界とも言っています。事事無礙は「個と個が円融交参してお互いにさまたげない自他不二の境地」とあります。

(蛇足) 私の幼なじみに教員生活、校長、教育長を経て現役を退いた今も、子ども達を相手に野外教室で教えたり、後輩の教師の相談に乗ったりしている友人がいます。その友人が地元紙に掲載しているエッセイの題が『共創・共育・共感』です。高齢化、人口減少が進み、その上コロナや戦争と子ども達を取り囲む環境は大人以上に厳しいものがあります。そのなかで、子ども達に元気を与え、また子ども達から元気を貰いながら、人がひとつになって、共に育ち、感じ、人と地域を共に創って行こうという思いからのエッセイのタイトルだと思います。3月末に掲載されたものを一部紹介しますと、

「日常の至るところで『教えること・学ぶこと』の関係は見られます。…息をしっかりと吐ききるとしっかりと吸い込むことができるように、蓄えた知識や知見を外に出しアウトプットすればするほど、逆に学ぶ力すなわちインプットの力も大きくなります。」と述べ、続けて

「…学校のことを英語ではスクールといいます。元来はギリシャ語で「ゆとり」を意味します。…ゆとりとは「学ぶ・考える・教えること」に十分に浸ることができる精神的・時間的「ゆとり」のことです。…「ゆとり」をもって取り組むことによって子ども達は自分一人では到達できないような学びを、先生の教えや仲間の支えで達成していくことが出来るようになります。」と結んでいます。（「南海日日」『共創・共育・共感』おわせ学び工房、二村直司から）

坐禅に十分に浸る「精神的・時間的ゆとり」を通して自分をみつめ、＜柔らかな心、まっば
だか＞になることができたか、心のしこりがなかったかを問い直してみたいと思います。

(文責 中村彰利)